

2026 年 1 月 20 日
2025 年度第 5 回理事長室 IR 委員会
総務部 IR 室

分析報告書

-2025 年度春学期授業評価アンケート分析-

要旨

2025 年度春学期の授業評価アンケートの回答結果を対象に、授業満足度の規定要因を明らかにするため、複数の分析からアプローチをした。その結果、学生の授業満足度は「授業構成・運営品質」と「学習成果の実感」の二つの因子によって規定されること、そして自由記述分析からは、スライドや資料の視認性など授業の運営面への指摘があることを確認できた。本報告書では、これらの知見をもとに授業改善に向けた観点を示した。

はじめに

2025 年度学長室・FD委員会が実施した春学期授業評価アンケートの結果分析を行った。同アンケートは、学生の視点から授業の内容や運営方法を評価し、教員による授業改善および大学全体の教育の質保証に活用することを目的として、毎学期実施されている。本報告書では、アンケートの回答結果を概観したうえで、重回帰分析・共分散構造分析による満足度規定要因の検証、および自由記述の分析を行い、授業満足度を高めるための観点を明らかにするものである。

1. 調査の概要

同アンケートは、2025 年度春学期授業開始の第 5 週目から第 7 週目に実施されたものである。同期間に教員より授業時間内の回答の周知と呼びかけが行われた。その後、学生から提出されたアンケート結果を元に、第 8 週目から第 9 週目に教員が改善計画書の回答、および学生への公表を行い、第 10 週目以降に改善計画を実施するという流れで行われた。調査の結果、回答率は 43%となった。アンケートの構成は「Ⅰ.履修とシラバス（質問 1 から 2 まで）」「Ⅱ.授業内容（質問 3 から 9 まで）」「Ⅲ.授業・課題提出（質問 10 から 11 まで）」「Ⅳ.授業外学修（質問 12）」「Ⅴ.あなたの学び（質問 13 から 16 まで）」「Ⅵ.授業評価（質問 17）」「Ⅶ.授業についての自由記述（質問 18）」となり、質問 1 から 17 までは 5 件法で、原尺度上は数値が低いほどポジティブ、高いほどネガティブな評価となる。ただし、分析にあたっては逆転処理を行っており、以降の章で示す数値は、数値が高いほどポジティブ、低いほどネガティブな評価を表す。質問 18 は 2 件法で、記述を希望しない学生は「1.記述することがない」を選択することでアンケートが終了し、記述を希望する学生は「2.記述した

いことがある」を選択したうえで記述する形式で行われた。アンケートは匿名で行われた。

2. 回答結果の全体像

2.1 回答件数の分布

アンケート調査結果を整理した結果、5 件法の質問項目では 4 や 5 の結果に回答が集まっているため、本学の授業評価は概ねポジティブな評価を獲得していることが分かった。一方、回答が 1 や 2 が多い質問内容は、質問番号 12 番「授業外の学修（予習・復習）として（1 科目につき）次の時間を費やした」のみとなり、回答 2「1 時間以内」30.9%、回答 1「全くしない」29.8%の順に多い結果となった。また、質問番号 18 番「記述する・記述しない」については、1「記述しない」が多く、2「記述する」を選択したのは 4%にとどまった結果となった。

2.2 記述統計

次に、回答結果の記述統計を掲載する。回答が 5 件法であるため、回答の平均値が 4.0 以上を示している項目はポジティブな評価結果を表し、質問番号 4,5,6,7,8,10,11,13,15,17 の 10 項目（全体の 59%）が該当した。次に、3.0 以上 3.9 以下は中立的な結果であり、質問番号 1,2,3,9,14,16 の 6 項目（同 35%）が該当した。最後に、2.0 以上 2.9 以下はネガティブな結果であり、質問番号 12 の 1 項目（同 6%）が該当した。

3. 分析の枠組み

今回の 2025 年度春学期の授業評価アンケート分析では、次の 4 つの分析を行った。分析①満足度に影響を与える観測変数の抽出：授業評価の主体である学生の授業満足度を目的変数とし、アンケート調査で観測された変数を説明変数として、重回帰分析で仮説検証をおこなった。これにより、授業満足度に影響を与える観測上の変数を明らかにすることができる。分析②共通因子による満足度規定要因の検証：①で用いた観測変数の共通因子を明らかにし、それらから満足度への影響を共分散構造分析で仮説検証を行った。これにより学生の満足度獲得に繋がる説明変数の背景を明らかにすることができる。分析③サービス・エコシステムの視点による要因分析：サービス・マーケティングの視点を取り入れ、サービス・エコシステムを構成するサービス提供者、サービス受益者、両者を繋ぐ媒介変数、授業評価因子の計 4 つの因子間の関連性を探索的に共分散構造分析にて検証した。各因子間から授業評価因子への影響を明らかにすることができる。分析④自由記述の分析：質問番号 18 の自由記述に対して、ワードクラウド分析、および極性分析（ポジティブ・ネガティブ分析）によって、学生がどのような声を言及しているかを整理し、授業改善の観点を明らかにするものである。

4. 授業満足度を規定する要因

4.1 観測変数からの影響（分析①）

観測変数から満足度に対する影響を重回帰分析にて検証した。その結果、最も影響度を示したのは Q16（さらなる興味・意欲）であり、標準回帰係数は $\beta = .299$ ($p < .001$) であった。次いで、Q15（新しい知識・理解） $\beta = .178$ ($p < .001$)、Q14（授業目標達成） $\beta = .173$ ($p < .001$)、Q5（授業スピードが適切） $\beta = .146$ ($p < .001$)、Q4（授業内容が適切） $\beta = .144$ ($p < .001$)、Q8（黒板・動画が適切） $\beta = .085$ ($p < .001$)、Q9（質問・発言機会） $\beta = .044$ ($p < .05$)、Q12（授業外学修） $\beta = -.029$ ($p < .05$)、Q3（シラバスと授業が一致） $\beta = -.065$ ($p < .01$) の順であった。決定係数は $R^2 = .770$ ($p < .001$)、 $\text{adj}R^2 = .768$ であった。「授業内容(Q4)」「授業スピード(Q5)」「黒板・動画等の使用(Q8)」「質問・発言機会(Q9)」といった授業の実施形態に加え、「授業目標達成(Q14)」「新しい知識・理解(Q15)」「さらなる興味・意欲(Q16)」といったアウトプットが、統計的に有意な規定要因となっている。一方、「シラバスと授業内容が一致 (Q3)」と「授業外学修時間 (Q12)」は、いずれも負の値でありながら有意であった。ただし、単相関ではいずれも満足度と正の関連を示しており、負の符号は他の説明変数との重複によるものと考えられる。

4.2 共通因子からの影響（分析②）

観測変数の共通因子から満足度への影響を共分散構造分析にて検証した。その結果、16の観測変数に対して、2つの因子を抽出できた。一つ目は、Q4（授業内容が適切）、Q5（授業スピードが適切）、Q6（課題量が適切）、Q7（教材の使用・配布は適切）、Q8（黒板・動画が適切）から構成され、信頼係数 α は.951 であった。教員による授業構成と実施形態から構成されているため、「授業構成・運営品質（デリバリー・クオリティ）」と命名した。二つ目は、Q13（集中して授業に取り組んだ）、Q14（授業目標達成）、Q15（新しい知識・理解）、Q16（さらなる興味・意欲）から構成され、信頼係数 α は.923 であった。学生の授業に対する意欲と授業によるアウトプットから構成されているため、「学習成果・学習意欲（ラーニング・アウトカム）」と命名した。なお、両者の相関関係は $r = .822$ ($p < .001$) となり、高い結合度を示していた。目的変数である授業の満足度に対しては、「学習成果・学習意欲（ラーニング・アウトカム）」因子による標準回帰係数は $\beta = .676$ ($p < .001$)、授業構成・運営品質（デリバリー・クオリティ）因子によるそれは $\beta = .243$ ($p < .001$) となり、決定係数は $R^2 = .786$ ($p < .001$) であった。なお、モデルの適合度は、 $\chi^2 = 373.47$ 、 $\text{df} = 33$ 、 $\text{CFI} = .976$ 、 $\text{RMSEA} = .087$ 、 $\text{AIC} = 437.47$ であった。

4.3 サービス・エコシステムの視点（分析③）

サービス・エコシステムの視点から、授業評価因子を目的変数、サービス提供者、サービス受益者、媒介変数の3つの因子を説明変数とした共分散構造分析をおこなった。まず、目的変数となる授業評価因子はQ14（授業目標達成）・Q15（新しい知識・理解）・Q16（さらなる興味・意欲）・Q17（授業満足度）から構成され、「授業評価因子（ $\alpha = .931$ ）」と命名した。

次に、説明変数となる一つ目の因子は、質問Q1（シラバスを読んだ）・Q2（シラバスが役立った）・Q3（シラバスと授業が一致）から構成され「大学インプット（ $\alpha=.922$ ）」と命名した。二つ目の因子は質問Q4（授業内容が適切）・Q5（授業スピードが適切）・Q6（課題の量が適切）・Q7（教材の使用・配布は適切）・Q8（黒板・動画が適切）・Q9（質問・発言機会）から構成され「教員インプット（ $\alpha=.950$ ）」と命名した。三つ目の因子は質問Q10（授業出席）・Q11（課題提出）・Q12（授業外学修）・Q13（集中して取り組む）から構成され「学生インプット（ $\alpha=.595$ ）」と命名した。ただし、当該因子の信頼係数は一般的な基準（.70）を下回っており、出席・課題提出・授業外学修・集中という性質の異なる行動を一括して扱っているため、内部一貫性は十分とはいえない点に留意が必要である。分析の結果、目的変数と関連を示した因子は、学生インプットで $\beta=.624$ ($p<.001$)、次いで教員インプット $\beta=.299$ ($p<.001$)、大学インプット $\beta=.081$ ($p<.001$) の順に強い関連を示した（決定係数は $R^2=.877$ ($p<.001$) と説明力の高さを示した）。なお、3つの因子間の相関は、大学インプットと教員インプットが $r=.774$ ($p<.001$)、教員インプットと学生インプットが $r=.777$ ($p<.001$)、大学インプットと学生インプットが $r=.638$ ($p<.001$) となった。モデルの適合度は、 $\chi^2=1569.45$ 、 $df=113$ 、 $CFI=.933$ 、 $RMSEA=.097$ 、 $AIC=1683.45$ となり、やや適合度の良さを示す結果となった。

5. 自由記述の分析（分析④）

5.1 記述状況

分析④自由記述の分析をおこなった。まず、自由記述をした回答件数、学部間・学年間の比較を示す。「記述する」と回答したのは、質問番号 18 の総回答者のうち僅か 4%となった。学部間で見ると商学部が 39%、経営学部が 35%、人間科学部が 26%の順に多い結果となった。学年別で見ると、3学部ともに低学年ほど件数が増加し、高学年になるほど件数が減少する傾向となった。

5.2 出現頻度とポジ・ネガ分析

学生が回答した自由記述の内容を、ワードクラウドにて可視化を行った。出現頻度が高いほど大きく表示され、逆に頻度が低いほど小さく表示されている。ワードクラウドで表示された 5つの主要キーワードとその他のキーワードの出現件数が多いものについて取り上げる。まず、主要キーワードには、①授業関連 63.1%、②先生関連 15.9%、③課題・レポート関連 12.1%、④説明関連 6.4%、⑤学生・私語関連 2.5%を抽出した。これら全体でポジティブの内容が 18.5%、ニュートラルのものが 51%に整理できた。主要キーワード以外の出現件数が多い上位 5位(同順位を含め 6キーワード)を抽出した。⑥スライド関連 35.8%、⑦文字関連 15.1%、⑧スピード 13.2%、⑧音声 13.2%、⑩資料関連 11.3%、⑩配布関連 11.3%の順となった。また、主要キーワード以外の記述全体を分類したところ、ポジティブな内容は 12.7%、ニュートラルは 59.6%とあった。キーワードの抽出方法は、自由記述の

内容から代表キーワードを抽出しており、1件の記述に複数のキーワードが含まれる場合があるため、記述件数とキーワードの件数は必ずしも一致しない。

5.3 主要キーワードの内容

5つの主要キーワードを分類した。その結果、①授業関連キーワード（63.1%）には、ポジティブには授業の分かりやすさや学習意欲の向上を評価する声が多く、ニュートラルにはグループワークの拡充を望む改善案がみられた。②先生関連キーワード（15.9%）には、ポジティブには教員の話し方や熱意、説明の分かりやすさへの好感が多く、ニュートラルには教員に対する率直な感想がみられた。③課題・レポート関連キーワード（12.1%）には、ポジティブには課題を通じた復習習慣の定着やフィードバックへの評価がみられた。④説明関連キーワード（6.4%）には、ポジティブには説明の丁寧さや補足の分かりやすさが挙げられ、ニュートラルには資料の視覚化（写真・画像の活用）を望む声がみられた。⑤学生・私語関連キーワード（2.5%）には、ポジティブには授業内でのコミュニケーションや、グループワークを通じた他者との交流を評価する声がみられた。

5.4 その他キーワードの内容

最後に、その他の記述内容を対象にし、出現件数の多い順に上位5位までのキーワードを抽出・分類した。その結果、⑥スライド関連（35.8%）には、ポジティブにはスライドの構成の分かりやすさや、補足説明による理解の深まりを評価する声がみられた。⑦文字関連（15.1%）には、ポジティブには板書の丁寧さや、書くスピードへの配慮を評価する声がみられた。⑧スピード関連（13.2%）には、ポジティブには授業のテンポの良さや効率性を評価する声がみられた。⑧音声関連（13.2%）には、ポジティブにはマイクの使用による聞きやすさを評価する声がみられた。⑩資料関連（11.3%）には、ポジティブには資料の整理された分かりやすさを評価する声がみられた。⑩配布関連（11.3%）には、ポジティブには事前配布による復習のしやすさを評価する声が寄せられた。

6. まとめ

本報告書では、2025年度春学期授業評価アンケートの回答結果について、回答結果の概観を行ったうえで、重回帰分析、共分散構造分析、自由記述分析を行い、授業満足度を規定する要因を検証した。その結果、次の4点を明らかにした。①観測変数から満足度への影響（分析①）：「授業内容(Q4)」「授業スピード(Q5)」「黒板・動画等の使用(Q8)」「質問・発言機会(Q9)」といった授業の実施形態に加え、「授業目標達成(Q14)」「新しい知識・理解(Q15)」「さらなる興味・意欲(Q16)」といった授業のアウトプットが、統計的に有意な規定要因であることが確認された（ $R^2=.770$ ）。数値を比較すると、授業の実施形態よりも授業のアウトプットの方が影響力の高さを示していた。②観測変数の共通因子から満足度への影響（分析②）：「授業構成・運営品質（デリバリー・クオリティ/ $\alpha=.951$ ）」

と「学習成果・学習意欲（ラーニング・アウトカム／ $\alpha=.923$ ）」の2因子が抽出され、いずれも満足度に有意な関連を示していた（前者 $\beta=.243$ 、後者 $\beta=.676$ 、 $R^2=.786$ ）。両因子の相関は $r=.822$ であり、高い結合度を示した。③サービス・エコシステムの視点からの検証（分析③）：「学生インプット（出席・課題提出・授業外学修・集中／ $\beta=.624$ ）」「教員インプット（ $\beta=.299$ ）」「大学インプット（ $\beta=.081$ ）」の順に、授業評価因子（アウトプット）への影響度を示した（ $R^2=.877$ ）。①から③を通して、授業の満足度は「授業構成・運営品質」と「学習成果の実感と学習意欲」によって規定されることが明らかになった。大学側の情報整備（シラバス）については、単相関では満足度と正の関連を示すものの、他の要因を統制すると独自の効果は限定的であり、直接的な規定要因というよりは基盤的・支援的な位置づけにあると考えられる。④自由記述分析（分析④）：主要キーワードとして「授業関連」「先生関連」「課題・レポート関連」「説明関連」「学生・私語関連」を抽出し、いずれも授業の分かりやすさや学習意欲の向上を評価する声を中心に、ポジティブ・ニュートラルな内容が多くを占めた。主要キーワード以外では「スライド関連、文字関連、スピード関連、音声関連、資料関連、配布関連」といった授業運営の細部に関する記述が集まり、こうした運営面への配慮が学生の受け止め方に影響している可能性が示された。

おわりに

本報告書では、①授業満足度が「授業構成・運営品質」と「学習成果の実感」という二つの因子によって規定されること、②自由記述分析では、スライドや資料の視認性など「授業運営の細部」への指摘が確認されたことを示した。今後は、本報告書で示した知見をもとに、授業運営面の改善と学習成果の可視化に向けて、学長室・FD委員会をはじめとする関係委員会・関係部署と連携した取り組みを進めていくことが求められる。